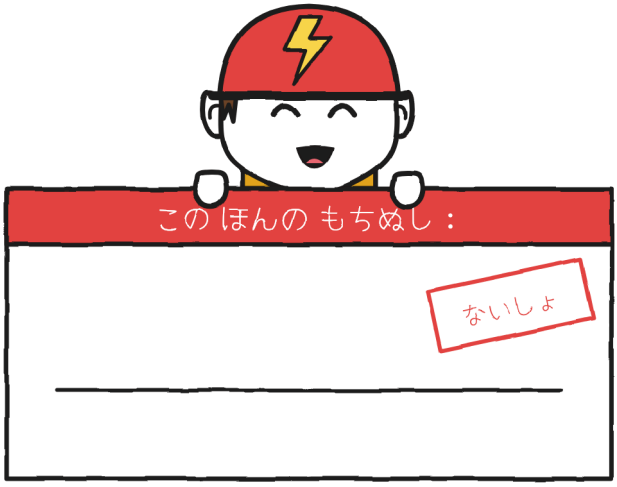


そして さきに よむのは わたし。 —J.

見つけたら、もどしてください。おねがいします。

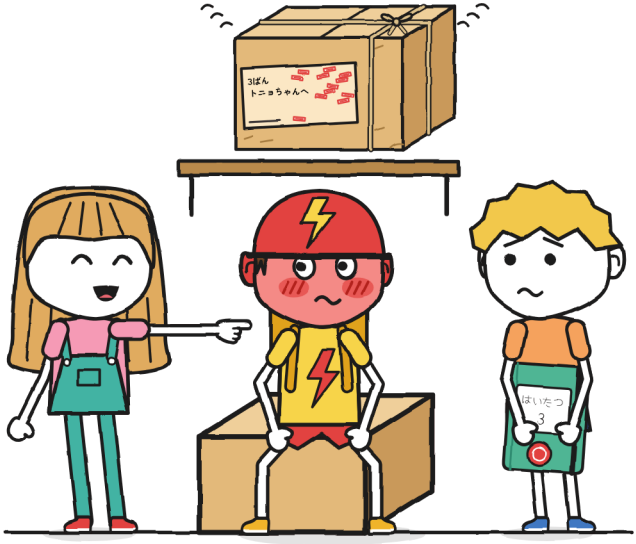
おはなしの なかだけ

このはんこは、お話の中だけのことをしめす：本当の荷物は飛んでもどってこない。本物の自転車に乗るときは、最後のページを見て。 —J.

ありえない はいたつ・3

へんそう おねがい

LinguAula



（グニの ノート）

サイズ **XL**・イラスト小説・13+

ありえない はいたつ・3
へんそう おねがい

シリーズ第3作。前の2作：『このにもつは かみつく』『かみなり前に あける な』

文と絵：LinguAula

日本語版：LinguAula

サイズ XL・イラスト小説・13+

初版：2026

© 2026 LinguAula · info@linguaula.com

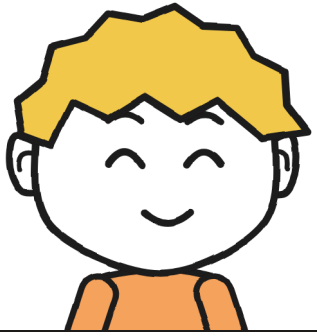
自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

フォント：Zen Maru Gothic、Yomogi、Zen Kurenaido、Andika、Patrick Hand、Caveat、Courier Prime（SIL OFLライセンス）。

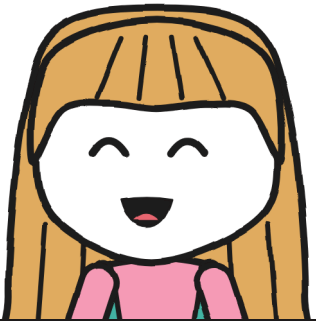
linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

この本のしっぴつちゅうに、ケガをした配達員は一人もいない。まっ赤になった人は、いる。 —J.

だれが だれ？



グニ。どようびの はいたつやさん。だれも たのんで いない ものを かく。この ノートは グニの。



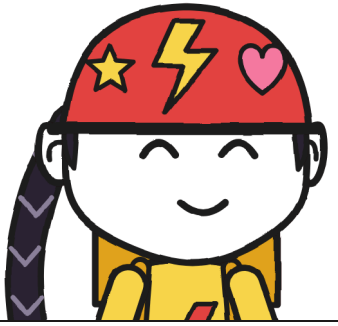
フリータ。みどりで かいて、「J.」と サインする。いつも たすけかたを しっている。それが もんだい。



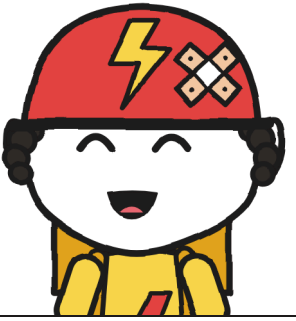
トニョ。じてんしゃで イナズマびんの はいたつを する。じっぷんで とどかなければ タダ。あかく なるのは ぶぶんごと。



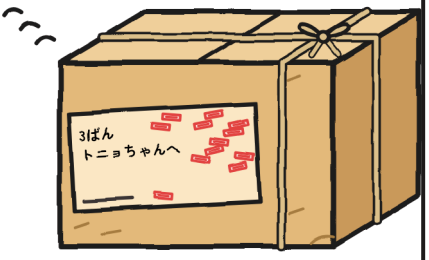
マラさん。「ありえない はいたつ」の てんしゅ。まじょの ぼうしを かぶっている。いうより ずっと おおくを しっている。



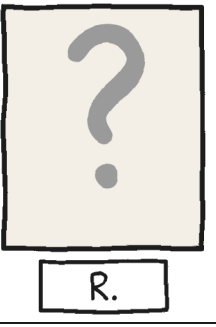
ゾーイ。イナズマびんの 人。いちばん はやい。あだなを つける人。



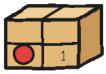
ブルーノ。イナズマびんの 人。1かい パンクした。2ねん まえ。



3ばんの にもつ。うごかすと なる。ラベルには なまえが ひとつだけ。



R.は、だれにも とどけられない にもつを おくるひと。その なまえを だれも いわない。



第１章

チリーン

チリーン。

とても小さな音だった。ほかのものがぜんぶだまりこんだときにだけ聞こえる、そういう音だ。ティースプーンがカップにあたる音とか、おもちゃの自転車のベルとか。音は、もどってきた荷物の棚から聞こえた。店に残っていたぼくたち四人は、ぴたりと動きを止めたので、はんこの火花が一つ落ちる音さえ聞こえそうだった。

あらしは、とっくに行ってしまっていた。フリータは、まだぼくの青いスツールの上に立って、みどりのペンを高くあげていた。線で消した19のとなりに、18と書いたばかりだった。マラさんは、片手をシャッターに向けて、のばしかけたままだった。ぼくは、いちばんいいときでも手のやり場にこまるほうだから、手では何もしなかった。

3番だった。そして、十分でとどかなければタダのイナズマ便で配達をしているトニョは、ヘルメットと同じ色になった。

ノートは新品だった。2番は、たった一度のあらしで使いきってしまった。これは緑色で、すみに店のはんこがおしてある。ぼくが、ちゃんと儀式(ぎしき)をして使いはじめるはずだった：最初のページにタイトルを書いて、新しい言葉を一つ。

グニのはいたつノート3。ないしょ。

「ないしょ」は、先に読むこと。だれにも言わない。 —J.

ぼくは舌(した)を出しながらタイトルを書いて、ななめになっていたときのために、消しゴムをとりにいった。もどってきたら、もうフリータが使いはじめていた。

「助けるために先に使ったの」とフリータは言った。「どういたしまして」

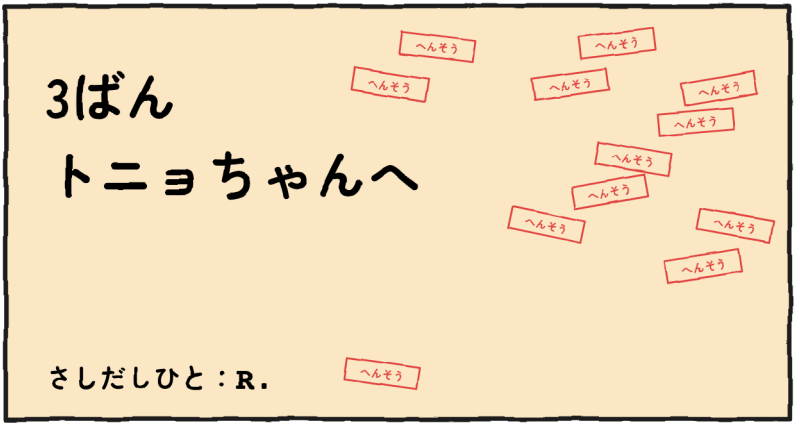
ぼくは、助けてなんてたのんでいない。でも、フリータには、そんなことは関係ない。

あとのことは、いつかフリータ以外の人が読むときのために書いておく。店の名前は「ありえない はいたつ」。店主はマラさんで、魔女(まじょ)だ。むらさき色の帽子(ぼうし)をかぶっていて、はんこを

持っている。そのはんこは、おすと、火を消したろうそくのにおいがする火花をとばす。左の棚には、もどってきた荷物がしまってある。だれにもとどけられなかった荷物だ。きまりはひとつだけ。受けとった人がラベルにきえないインクでサインしないと、荷物は夜明けに、とんで棚の元の場所へもどる。ばんごはんの時間のねこみたいに、きっかりに。荷物は二十こあって、おくってくるのは、いつも同じ人、R.だ。R.のことは、青いノートに、もう六つの手がかりが書いてある。フリータとぼくは、二つとどけた。ドラゴンのたまごと、走りまわるたね。かべには、フリータの字で、みどりで、「のこり18」と書いてある。

フリータは、みどりのメモの人だ。ぼくはグニ、町に来たばかりの子で、荷物のほとんどがまだ箱の中にある。トニョは、イナズマ便の配達員で、黄色いリュックの子だ。土曜日はばつとして、ぼくたちの店で働いている。あらしのあとは、店に自分の場所ができた：ひっくりかえした配達用の箱が、スツールのとなりに。マラさんが、説明もなしにおいたのだ。「いまのところ」とマラさんは言った。「いまのところ」がいつまで続くのか、聞く勇気のある者はいなかった。

3番は、いちばん上の段にあった。ドラゴンのたまごと走るたねがいなくなってできた二つのすきまのとなりで、ラベルがこちらを向いていた。ぼくは読みに近づいた。立ったまま、さわらずに。



タイプで打った三行。3番。トニョちゃんへ。そして一番下に、さしだしひと：R.。名前と最後の行のあいだには、まっ白な紙が、まるごと一面のこっていた。まわりには、「へんそう」のはんこが十二こ。かぞえた。

フリータは、スツールからひょいと下りて、ぼくのとなりに来た。声に出して読んだ：

「トニョちゃ……」

そして、口をとじた。

フリータは、ことばのとちゅうでだまったりしない。ぼくはトニョを見て、わけがわかった。

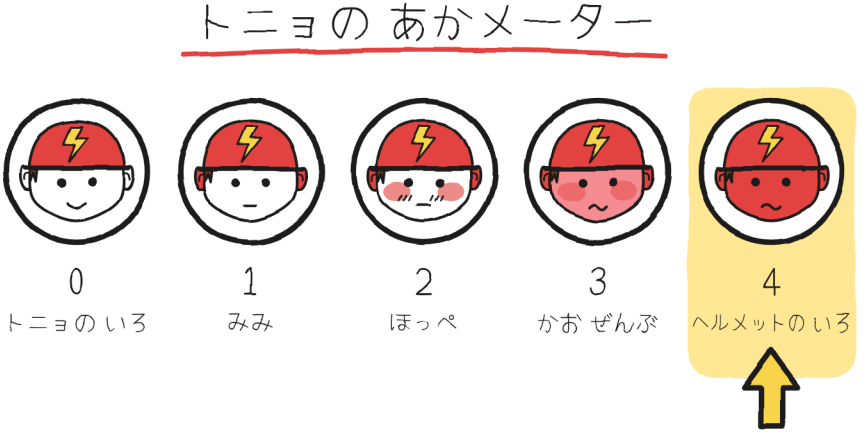
半分だけ読んだ。あとの半分は飲みこんだ。 —J.

いきなりまっ赤になる人もいる。トニョはちがう：トニョは、部分ごとに赤くなる。まず、耳から。つぎに、ほっぺた。それから顔ぜんぶがいっぱいになって、ヘルメットのあごひもまで来る。でも、まだ最後の段(だん)がのこっている。いちばんひどいやつで、顔とヘルメットの区別がつかなくなるときだ。2番のふるえメーターのとき以来、ぼくは、何かが変わるのを見ると、目もりをつけずにはいられなくなった。だから書きとめた。

フリータは、ラベルのまだ読んでいない部分を読もうと、荷物にうでをのばした。

「その荷物は、まてる」とトニョは、ものすごい早口で言った。「何年もまってるんだろ？　じゃあ、あと一日。十日でもいい。イナズマ便はいそがない」

イナズマ便がそんなことを言うのを聞いたのは、これがはじめてだった。



「今夜は何も開けない」とマラさんは言った。「それと、棚には勝手にさわらない」

フリータの手は、ラベルから指いっぽんぶんのところで、宙にういたまま止まった。だれもさわらなかった。なのに、また鳴った。

チリーン。

「ドアだよ！」とフリータは言った。ぼくの知らない声だった。高すぎて、早すぎた。

ドアは、ベラさんが帰ってから、ずっとしまっていた。

わからないことがあると、ぼくはリストを作る。チリーンの容疑者（ようぎしゃ）：

1. ドア。（フリータの意見。しまっていて、風もなく、おす人もいない。）
2. 歩道にとめた、トニョの自転車。イナズマ便のベルつき。（鳴るのはリンリンで、チリーンじゃない。でも、ベルはベル。）
3. ゴムのカエル。（フリータが、すぐに無実だと言った。知っているそうだ。）
4. 3番。

3番は、礼儀（れいぎ）として、いちばん最後に書いた。

ぼくは、たしかめに歩道に出た。カエルは、通りがかりに持っていった。容疑者（ようぎしゃ）は、遠くから取り調べるものじゃない。

もう雨はやんでいた。通りは、ぬれたアスファルトのにおいがして、水たまりのひとつひとつに街灯が入っていた。ドアを開けてしめた：ギィー。トニョの自転車のベルをならした：リンリン！　カエルをおした：キュッ。

ガラスのむこうで、フリータが指をふって、「ちがう」と言っていた。音がするたびに、同じことをした。車のワイパーみたいに、右へ左へ。どれも、ちがった。

ぼくは店にもどって、カエルをカウンターにおいた。トニョは、ぼくがじっと見ているのに気づいて、箱の中で身じろぎした。

チリーン。

ぼくはしゃがんだ。トニョの箱は、棚(たな)の足にもたれかかっていた。

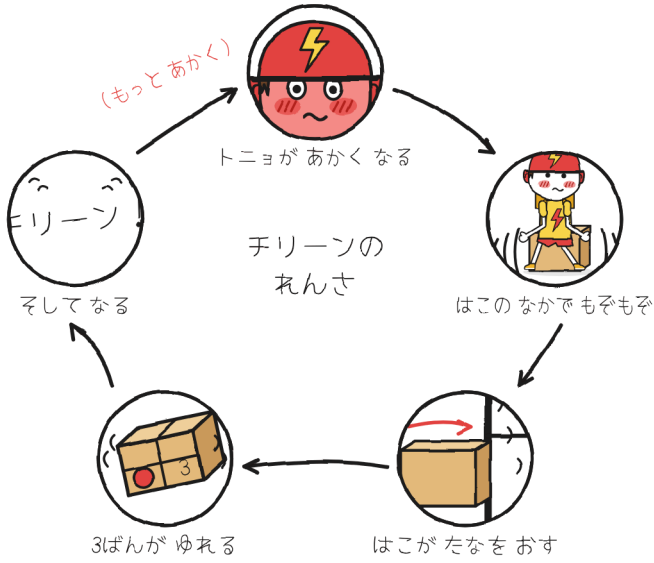
その場で、ひざをついてかいた。まるい絵になった。どれだけ見ても、どこから始まるのか見つからなかったから。

まほうじゃなかった。トニョだった。3番の中には、動かすと鳴るものが入っている。

わたしと同じ。 —J.

トニョは、ぼくの視線(しせん)を棚(たな)の足まで追って、自分の箱を見て、じっとしていることに決めた。

それは、ゴムをのばしたあいだだけ、もった。



じっと。それからもっと、じっと。「じっとしろ」と考えているのが聞こえるほどじっとして、こめかみに汗が一つぶ流れていた。フリータは、もう一分以上しゃべっていなかった。フリータにとっては、水の中で息を止めているのと同じことで、遅かれ早かれ、いちばん口に近いところにあるものをくわえて、浮かびあがってくる。

「トニョちゃんって、だれ？」

トニョは、とびあがった。箱が棚の足をおして、棚がゆれて、3番が、どんなチリーンにもふさわしくないほどの力で

言った。「チリーン！」マラさんは、三つ数える人みたいに、天井を見た。

「ただ聞いただけ」とフリータは言った。「聞いただけで、棚はおせないでしょ」

この一言は、おした。



「ぼくのことだ」とトニョは、自分のスニーカーを見ながら言った。「小さいころの」

あまり小さい声だったので、トニョのいちばん近くのカウンターにいたカエルのほうが、ぼくよりよく聞こえたはずだ。

フリータは口を開けた。しつもんが行列をつくっているのが見えた。日曜の朝のパン屋のように、先頭の子はもうお金を手にしている。それから、まだスニーカーを見ているトニョを見て、口をとじた。

「もうきかない」と言った。

がまんするのは大変だった。足に出ていた：コツ、コツ、コツ、と店のゆかをたたいていた。

聞かなかったことは九こ。ぜんぶ書きとめてある。 —J.

「どうして一度もとどけなかったの？」とぼくはマラさんに聞いた。

「十二回、持っていったよ。」だれも、はんこをかぞえる必要はなかった。「ラベルを見てごらん。通りの名前も、番地も、名字もない。見つけたトニョちゃんは、ぜんぶ試した」

マラさんは、指をおって、記憶（きおく）だけで数えていった。ぼくは、聞くそばから絵にした。カナリア。ほんとうにトニョちゃんという名前で、ラベルをふんだ：ダメ。アントニオさん、71さい。めがねをかけて、紙を二回読んで、「そうだといいんだけどね」と言った。ショーウィンドウを見るような目で、ラベルを見ていた。それから、うんがのボート。わきに名前がペンキで書いてあったが、これもサインしなかった。手がないからだ。

「トニョは？」とフリータが聞いた。

「この前やってみたときは、まだトニョを知らなかった」とマラさんは言って、トニョを見た。「それに、小さいころなんとよばれていたのか、だれも教えてくれなかった」

マラさんは、カウンターの下から、むらさき色のぬのを出して、3番にかぶせた。オウムをねかせるときに、かごにかける

みたいに。それから、トニョに、ちょっと立ってほしいとたのんで、箱を棚(たな)から40センチ遠ざけた。

マラさんの トニョちゃんたち



1. カナリア。
（ラベルを ふんだ。ダメ。）

2. アントニオさん、71さい。
（「そうだと いいんだけどね」）

3. うんがの ボート。
（てが ない。）

「これでいい。好きなだけ動いていいよ」

トニョは帰ることもできた。自転車はドアのところにある。十分で町の反対のはしまで行ける。でも、また腰(こし)をおろした。

なぜかはわからない。でも書いておく。

そして、トニョの箱にはせもたれがないので、ぼくが一つかいた：高くて、少しカーブして、小さなクッションつき。えんぴつで、てんせんで。下に、小さい字で：「せもたれ（ぼくの考え）」

だれもあなたに、せもたれなんてたのんでいない。 —J.

店をしめるとき、トニョは最後までのこって、ヘルメットのひもをとめていた。イナズマ便なら重大なルール違反（いはん）になるほど、ゆっくりと。マラさんは、あかりを一つずつ消していった。むらさき色のぬのは、いちばん上の段（だん）の荷物にかかったままだった。

「マラさん。あした、あの荷物のことで話しに来る。ひみつで」

「この二人は店の人だよ」と、マラさんはふりむかずに言った。

トニョは、ぼくたちを見た。まずフリータを、それからぼくを。ぼくは、スツールの上でせすじをのばした。

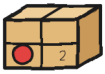
「この二人ならいい」とトニョは言った。「でも、イナズマ便の人はだめだ」

外に出て、水たまりの中を、自転車を手でおしながら、遠ざかっていった。

チリーンの持ち主は、もうわかった。あとは、その持ち主がそれをほしがるかどうかだ。

どうすれば助けられるか、わたしにはもうわかっている。 —J.

それがぼくは心配なんだ。



第 2 章

いいとは いってない

日曜日は、店がやすみだ。その日曜日、マラさんは、シャッターを半分だけあげた。かがんでぎりぎり通れる高さだ。そして、手書きのはりがみをさげた：

おやすみ（きみはべつ）。

トニョは十一時に来た。入る前に、道の左右を見た。道をわたるときのように。イナズマ便の人は、だれも来ない。リュックをむねにぴったりくっつけて、さわらないようにかがんでシャッターをくぐると、店は、音もなくトニョをのみこんだ。

わたしたちは十時半に来た。念のためにね。 —J.

ぼくは、はりがみを二回読んだ。どこにも「それとフリータ」とも「それとグニ」とも書いていない。でもマラさんは、

何も言わずにドアを開けた。左のまゆを上げて、ぼくたちを通した。

ぼくたちは、何も待っていない人の顔をして、スツールにすわった。その顔は、ぼくがだれよりもへただ。

マラさんは、3番をカウンターにおいて、ぬのをとった。

「3番の荷物。トニョちゃんあて。あなたのこと？」

「そうだった」

「それでいい。ほしい？」

トニョは、箱を見た。箱は、何も言わない。

「いいとは言ってない」

「いやだとも言ってない」

「いいとは言ってない、と言ったんだ」

ぼくは、そこにいさせてもらうためなら、「うん」と何度も言ってきた。トニョは、それを言わないまま、そこにいた。ぼくは、スツールのふちをつかんだ。

「サインしないためのセリフが三つ」とフリータがささやいた。「三つとも、「いい」じゃない。数えたよ」

マラさんは、それ以上はおさなかった。

トニョは、箱を、やけどしそうな小なべをつかむようにつかんだ。両手で、手ばなしたいのをこらえながら。重さをたしかめた。まわした。耳に近づけて、そっとゆらした。

チリーン。

あわててはなして、そのまま自分の手を見つめた。

「もしトニョが荷物を家に持って帰ったら？」とフリータは言った。「荷物が、受けとった人の家でひとばんねたら、もうとどいたことになる。りくつの問題だよ」

「へんそうのはんこは、りくつじゃ決まらない」とマラさんは言った。「インクで決まるんだ」

「はんことわたしは、考えがちがう」とフリータはつぶやいた。ぼくの知るかぎり、フリータの降参（こうさん）にいちばん近い言葉だ。

はっきりさせるために、表を作った。タイトルは「配達になる？」。

- 見る：ならない。
- つかむ：ならない。

- うちに持って帰る：ならない。
- きえないインクでラベルにサイン：なる。

「この配達は、あなたたちのもの」とマラさんは、フリータとぼくに言った。「かみなりのときと同じ。ただし、じょうけんが三つ」

マラさんは、指でかぞえた。

1. あなたたちは箱を開けない。ラベルもはったまま。
2. 3番が店を出るのは、トニョがたのんだときだけ。
3. 受けとる人は、したければサインする。しなければ、夜明けに荷物はもどって、ここでは何も起こらなかったことになる。

フリータは、学校みたいに手をあげた。

「もしトニョがずっとほしがらなかったら？」

「ずっとそのままだ」

「ずっとそのまま」は期日じゃない。 —J.

トニョは、長いあいだだまっていた。フリータが、ストップウォッチではかった：四分。イナズマ便なら、配達のほぼ半分だ。その四分のあいだ、トニョは荷物を見て、ドアを見て、自

分の手を見た。見なかったのは、ぼくたちだ。それがありがたかった。

「持って帰る」とトニョは、やっと言った。「とじたまま。考えるために。いまのところは」

「あなたがたのむのね？」とマラさんが聞いた。

「ぼくがたのむ」

ぼくは、持ちだしカードを書いた。だれにも、ちがうと言わせないために：

- 箱：とじている。よし。
- ラベル：はってある。よし。
- たのむ人：トニョ。よし。
- サイン：まだ。

外は、あらしのあとの日曜日の日ざしで、なんでもあらいたてみたいに見えた。トニョは3番を自転車のかごに入れた。手をはなすと、鳴った：チリーン。

トニョは、ハンドルの、イナズマ便のベルがついている所を見つめていた。灰色（はいいろ）で、まるいベルだ。

「どうしたの？」とフリータが聞いた。

「なんでもない」

そして、自転車を手でおして、歩いて帰っていった。トニョは、ふだんぜったいに歩かない。

あの「なんでもない」は、「何かある」ってことだよ。助けなきゃ。 —J.

ドアのところから、角にイナズマ便の自転車が二台とまっているのが見えた。どちらも黄色いリュックだ。こしまでとどくおさげの女の子と、そのとなりの、ものすごく大きな男の子。

「トニョ！　かごに何が入ってるの？」と、おさげの子がさけんだ。

「配達だ」

「だれあて？」

「お客さんあて」

うそはついていない。でも、答える前に、ラベルが自分のほうを向くように、かごの中で箱をゆっくりまわした。

「イナズマ便の人はだめだ」の意味が、やっとわかった。



その夜、ぼくは部屋のブラインドをあげたままにした。うちは店の向かい。3番がもどるなら、ぼくに見えるはずだ。まどの前に、いすを二つならべた。一つはぼくの。もう一つは、目ざまし時計の、小さいほうの。店のドアの上の小さなまど。マラさんが、このためにいつも開けておくまど（はじめての日、ぼくはポストだと思った）は、まっ黒で動かない四角だった。

「グニ？」とお母さんが、ろうかから言った。「起きて何してるの？」

「荷物を見はってるんだ」

「そう。でも、パジャマで見はりなさい」

はじめの二十分は小さなまどを見て、つぎの二十分は目ざまし時計を見て、あとはずっとノートを見ていた。待つとき、ぼくには、手でやることが必要だから。それで、まどのふちと街灯のあかりで、トニョのいすをよくした。その1は、土曜日のせもたれ。その2は、ひじかけがついて、コップの丸いあなもついている。コップもかいた。ナプキンつきで。

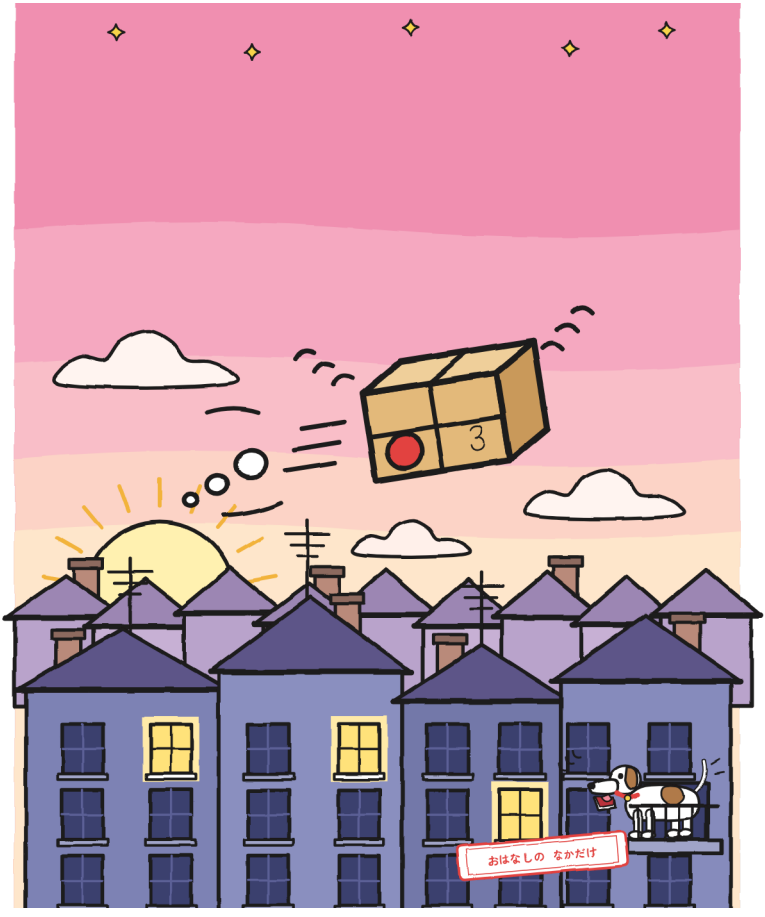
フリータも見はりたがった。でも、フリータの部屋のまどは中庭に向いている。中庭からは、ほしてあるせんたくものしか見はれない。

夜明けに、すがたを見せるより先に、音が聞こえた。

チリーン、チリーン、チリーン。

屋根の上を、急ぐようすもなく、やってくる。まだどの角に止まるか決めていない、アイスクリームの車みたいな音だ。まどに明かりがついた。もう一つ、もう一つ。三つ。だれかが出席をとっているみたいに。犬がほえた。4番の犬で、飛ぶものは何でもほえる。荷物でも、はとでも。そして、見えた：ピンク色の空を背(せ)に、小さな四角いかたまりが、ぼくの通りを、ぼくのまどの高さで横ぎり、店のドアの上の小さなまどから入り

こんだ。中で、棚にとまる音が聞こえた。最後のチリーン。みじかい。だれかがテーブルにかぎをおくときのような。



「あれだった？」とお母さんが、ろうかから聞いた。まだ半分ねている声だった。

「あれだった」

「じゃあ、朝ごはんにしましょう」

ぼくは、もう少しだけ、まどのそばにいた。お母さんがまたよんだとき、朝ごはんを食べにいった。



学校のあと、店に行った。3番は棚(たな)の上にあって、はんこがひとつ、ふえていた。赤くて、インクはまだ新しい。だれもおしていないのに：十三。

また棚(たな)に置かれているのを見るのは、かわいそうだと、ぼくは言った。

「ばつじゃない」とマラさんは言った。「きまりだ。だれもサインしていない。だからもどる」

はんこが十三こ。このままだと、箱が見えなくなる。 —J.

トニョは、五時二十分に、配達が終わってからやってきた。3番がもどったかどうかは、聞かなかった。家の上を通るのを、聞いていたのだ。自分の箱にすわった。箱はまだ、棚(たな)から40センチのところにあった。トニョは、荷物を見ないようにし

て、見ていた。だれかに見られているとわかっている人を見るときみたいに。

これは、ぼくは見ていない。トニョが話してくれた：

トニョが はなして くれた こと



「げんかんマットにおいた。ひとばんじゅう」

「どうして家の中に入れなかったの？」とフリータが聞いた。

「うちには、ぼくをそうよぶ人がもう十分いるから」

おこったわけじゃない。道を教えるときの、たいらな声だった。フリータは、「十分」って何人なのかを聞かなかった。足が、コツと、一回だけ鳴った。

「サインひとつで、ぜんぶかいけつするのに」とフリータは、トニョが帰ったあとで言った。「たったひとつ。二秒ですむ。ストップウォッチで、自分のサインをはかってみた」

ほんとうだった。三回、ばらばらの紙に、いつものJを書いた：二秒、二秒、そして、ななめになった一回は、二秒半。

ぼくはノートを開いて、ボールペンで、強くおして書いた。みどりのペンでかくされないように：

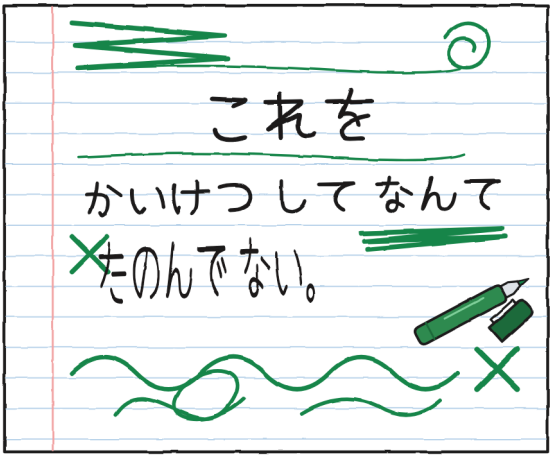
これを　かいけつ　してなんて　たのんで　ない。

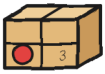
あまり強くおしたので、字は次のページにも、でこぼこになって写った。フリータは、みどりのペンを出した。線で、うずまきで、バツで、波（なみ）の雲でためした。みどりは消えない。でもその文は、かくせなかった。下にそのまま、大文字のまま、紙にしずんでいた。

読んだよ。さんせいできない。いまのところは。 —J.

ぼくは、フリータを見た。

別の考えがある。そんな目で見ないで。 —J.


これを
かいけつ してなんて
たのんでない。



第 3 章

サイン

火曜日、学校から帰ると、店の前の歩道につくえが出ていた。つくえは、ひとりで通りに出たりしない。しかもこのつくえは、着かざっていた：地面までたれる黄色いテーブルクロス、フリータの字のはりがみ、そしてまん中には、ぬのをかぶせた、四角くてじっとした、だれかに質問（しつもん）されるのを待っているようなふくらみ。

はりがみには、みどりで、はいたつやさんの サイン、と書いてあった。その下に、きょう。さらにその下に、もっと小さく：まちで いちばん はやい ひとたち。

つくえのうしろには、フリータが、手をうしろに組んで立っていた。映画（えいが）の切符（きっぷ）を売る人みたいな、まじめな顔で。ショーウィンドウのむこうでは、マラさんが電話をしていた。という

より、聞いていた：天井を見て、うなずいている。長い電話になったときに見る場所だ。

ぼくは、ふくらみをあごでさした。

「サイン台だよ」と、フリータは、ぼくが何も聞かないうちに言った。「サインしやすくするための台。わたし、サインを集めてるの」

サイン台というものは、ぼくの知るかぎり、ない。あるのは譜面台で、バイオリンをひくときに楽譜をのせる。でも、あまりにも自信たっぷりに言うので、十秒のあいだ、バイオリンについて知っていることが、あやしくなった。

「いつからサインを集めてるんだ？」

「きのうから」

きのう、フリータは、別の考えがあると言った。その考えには、テーブルクロスがついていた。

サイン台の上には、せんのある紙があって、いちばん下に、わくがあった。というか、わくに見えた：はさみで切りぬいた、小さなまどだった。ぼくはしゃがんだ。テーブルクロスにも同じまどが、ちょうどその下にあった。

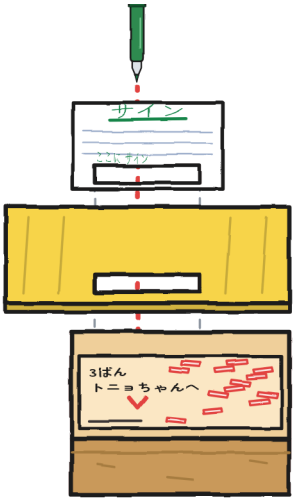
ぼくは、すみをもちあげた。サイン台は、ねかせた3番で、ラベルが上を向いていた：トニョちゃんへ。「へんそう」のはんこが十三こ。そして、テーブルクロスのあなのすぐ下に、サインの大きさぴったりの、まっ白な紙。

かいてみて、やっと全部わかった。ぼくは、そうやってものごとを理解（りかい）する。

しくみ

1. ちいさな まどの ある かみ。

2. あなの あいた テーブルクロス。



3. 3ばんの ラベルの、しろい ところ。

4. まどに サインした ひとは…… ラベルに サイン。

「わたしのペンで」とフリータは、うれしそうにささやいた。「きえないインクだよ。あしたはもうもどらない。トニョは、荷物を見せるまで知らないの。サプライズ！」

プレゼントをあげる人の顔だった。しかも、とてもよく選んだと思っている。指のさきが緑になるほど、ペンをにぎっていた。

ぼくは、マラさんのじょうけんを思いだした。二番めは、暗記している。

「トニョは、店から出してほしいとはたのんでいない。じょうけん2だ」とぼくは言った。

「あとでありがたがるよ」

「マラさんは？」

「電話ちゅうだった。『サインのつくえ』って言った。ほんとうにそうだし」

「サイン台は？」

「それは聞かれなかった」

ぼくは、フローラさんと八つめのたねのことを思いださせた。フリータは、フローラさんに、早すぎるサインをさせなかった。

「同じじゃない。あれはとちゅうの配達だった。これは近道だよ」

「じゃあ、きみがやれば」とぼくは言った。「ぼくはしない」

ぼくは、店の入口のだんにすわった。つくえに背中（せなか）を向けて、うでを組んで。

入口のだんにすわった。きりっとした顔で。まったく助けにならない。 —J.

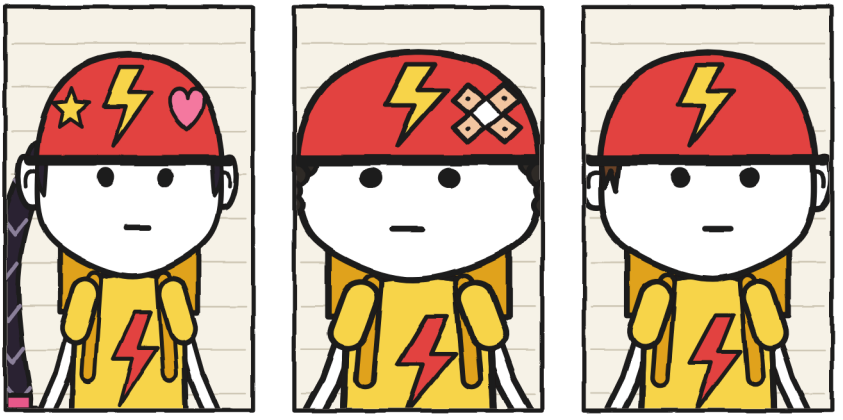


イナズマ便は、五時十分に、ぼくたちの通りをとおる。ベルは、すがたより先に聞こえる。三人が、一列で：先頭はゾーイ、いつもそうだ。つぎが、ブルーノ。たんすを運ぶみたいにペダルをふむ、大きな子だ。そして最後がトニョ。ちょっとはなれていた。列に自転車が三台あって、トニョのだけが仲間じゃないみたいに。

あとで、来たとおりに、一人ずつかいた。

ゾーイ、「ロケット」は、こしまでとどくおさげの子で、日曜日に、トニョのかごに何が入っているのかと聞いた子だ。いちばんはやくて、あだなをつける人。ブルーノは、タイヤにパッチがあたっていて、自転車のフレームには、念のために空気入れがついている。

イナズマびんの カード



ゾーイ、「ロケット」：
いちばん はやい。
あだなを つける。

ブルーノ、「パンク」：
1かい パンクした。
2ねん まえ。

トニョ：
あだなは ない。
まだ。

ゾーイは、はりがみを見て、ブレーキをかけた。

「サイン？　わたしたちの？」と言って、自転車からおりた。

あの人たちにサインをたのんだ人は、いままでいなかった。だからうまくいく。 —J.

ゾーイが最初にサインした。名前のまん中に星を一つつけて。ブルーノは「ブルーノ」と書いた。ゆっくり、舌(した)を歯のあいだにはさんで、一文字ずつ、まるく。ゾーイはそのペンを取りあげて、それを線で消して、となりに「パンク」と書いた。

「イナズマ便では、あだなは取れないんだ」とブルーノは、おこりもせずにぼくに教えてくれた。「一度パンクしたからね」

二年前の話だ。タイヤ一回分にしては、ずいぶん長いパンクだ。

トニョは、自転車から下りていなかった。日曜日に3番を見たときと同じ目つきで、つくえを見ていた：遠くから、ハンドルを両手でにぎって。

「つぎはトニョの番」とフリータは言った。「ここの下の、わくの中。いちばん大切な場所だよ」

そして、みどりのペンをわたした。

トニョは、サインをたのまれたことが、一度もなかった。自転車から下りて、せすじをのばした。

ぼくは、顔をそむけていた。入口のだんから全部を見ていた。口の中は「ぼくには関係ない」でいっぱいだった。

ぼくは立ちあがった。決めたわけじゃない。体が勝手にやった。ヒックみたいに、ぼくに相談もなく。

「トニョ、ま……」

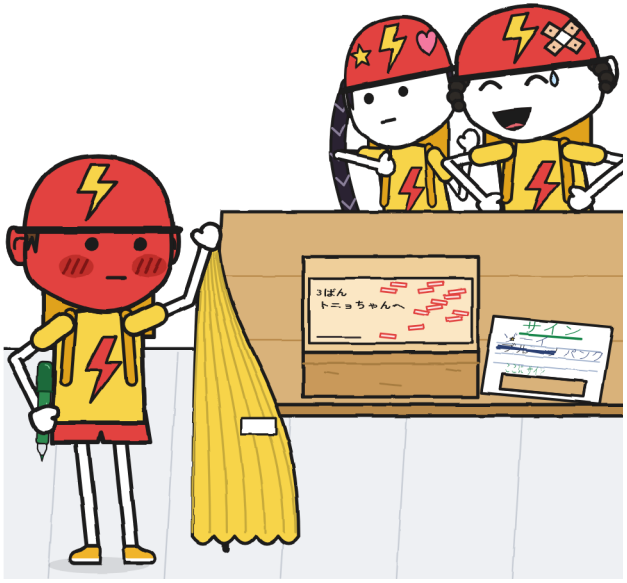
おそかった。トニョはサインするために、サイン台をぐいとひきよせた。すると、テーブルクロスの下で、ぼくより先に何かが口をきいた。

チリーン！

一秒のあいだ、すべてが止まった：紙。ペンを持ったトニョの手は、小さなまどから指いっぽんぶんのところ。ふくらみをかこむ、四つの顔。ぼくは、まだつくえに着いていなかった。

トニョは、テーブルクロスのすみを、二本の指でもちあげた。


サイン
チリーン！



「ト・ニョ・ちゃ・ん・へ」とゾーイは、ごほうびでも発表するみたいに、ゆっくり読んだ。

「トニョちゃん？」とブルーノは言って、笑った。

ゾーイは笑わなかった。ゾーイは考えていた。

フリータは、小さなまどに目を落とした。

トニョはどならなかった。ゆっくりペンにキャップをして、カチッと音がするまでおしこみ、紙の上においた。サインはしないまま。

「イナズマ便はわなにサインしない」

それから、ハンドルをつかんで、歩いていった。だれもペダルをこがないときに自転車が出す、時計みたいなカチカチという音をたてて。だれもあとを追わなかった。ぼくも。

首のうしろまで、ヘルメットの色になっていた。でも、それははずかしさの赤ではなかった。ちがう赤だった。

あかメーターには、その赤の番号がない。 —J.

マラさんは、むらさき色のぬのを持って出てきた。入口で立ち止まり、かたごしに棚（たな）のあいたところを見て、つくえを見て、フリータを見た。だれがやったか、聞かなかった。

3番にぬのをかけて、だきあげた。

「この荷物はとどいていない」とゾーイとブルーノに言った。「それに、ラベルになんと書いてあっても、それはトニョの問題だ」

ブルーノは、もう笑っていなかった。ゾーイは一度だけ、うしろを見た。もうむらさき色になった、ふくらみを。二人は自転車にのって、ベルもならさずに行ってしまった。ぼくの知るかぎり、はじめてだった。

ぼくはフリータがかたづけるのを手伝った：テーブルクロス、はりがみ、サインが二つとあなのあいた紙。ペンは、フリータが、キャップをしたまま自分でしまった。「言ったとおりだろ」とは言わなかった。「たいしたことない」とも言わなかった。たいしたことだったから。

二人でテーブルクロスをたたんだ。それぞれ、すみを持って。すみとすみを、ゆっくり合わせた。あなは、まん中にきた。

「あなたは何もしてない」とフリータは言った。

ぼくをのけものにするために言ったのだ。それはプレゼントで、ひとおりたたむあいだ、ぼくは、あやうく受けとるところだった：ぼくは何も切っていないし、どの棚（たな）からも、何もおろしていない。ぼくは、ありもしないしわをのばした。自分のすみを、フリータのすみにそろえた。入口のだんから、つくえがあった所まで、歩道のタイルをかぞえた。

十二まいもなかった。午後じゅう、ずっと目の前にあったのに。

「知らせるのがおそかった」と、ぼくはテーブルクロスを見ながら言った。「もっと早く言えたのに。マラさんをよべたのに」

フリータは答えなかった。ぼくからテーブルクロスを取って、必要よりもう一回おりたたんで、ぼくに返した。

それからフリータは中に入って、一人でマラさんに話した。何もかくさずに。ぼくは、テーブルクロスをかかえて、入口に立っていた。そこから全部聞こえた：小さなまどのこと、テーブルクロスのこと、棚（たな）のこと、電話のこと。マラさんは、最後まで聞いた。

「トニョには」とマラさんは、フリータが話しおわったあとで言った。「あなたが話しなさい」



水曜日、トニョは五時十分に、ブレーキもかけずに通りすぎた。まっすぐ前を見て、いないことの別のやりかたみたいな速さで。五時二十分にも、また通った：来るのが聞こえて、止まらないのが聞こえて、行ってしまうのが聞こえた。十分でとどけなければタダの人にとって、同じ通りを三回通って、一度も

止まらないというのは、店に入らないための、とてもへんなやりかただ。ドアをノックするのに、ずいぶん似(に)ていた。

ぼくは、同じ入口のだんにいた。

三回目には、フリータが歩道のまん中で、紙を持って立っていた。トニョを二回、通りすぎさせたのだ。

フリータは、紙を両手で、顔の高さにかかげた。空港のプラカードみたいに。トニョは、自転車の上から、片足(かたあし)を地面につけて、近づかずに読んだ。三つの文と、一つの言葉：「きみの荷物を持ちだした」「だまそうとした」「きみのラベルをみんなに見せた」。そして下に、ひとつだけ、もっと大きく、「ごめんなさい」。このとおりに知っているのは、あとでぼくのノートにうつしたからだ。「でも」も、「そんなつもりじゃ」も、「助けるために」も、なかった。さがして、二回たしかめた。

サインは「ーフリータ」。フリータは、なんにでも「J」でサインする。今回は、全部の字をつけていた。

「わかった。読んだ」とトニョは言った。

「ゆるしてくれる？」

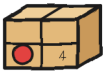
それは、紙には書いていなかった。フリータは、紙のふちに、指をぎゅっとおしつけた。

「読んだって言った」

トニョは、ペダルに足をのせて、行ってしまった。今回はちゃんとペダルをこいで、急がず、ブレーキもかけずに。フリータは、通りを見つめていた。それから紙を、オーバーオールのポケットにしまった。おりたたまずに。

その夕方、店では、トニョの箱が空っぽのままだった。

名前を全部書いてサインした。それくらいはしないと。 —J.



第 4 章

ちいさな じてんしゃ

木曜日、トニョは、道の左右も見ずに店に入ってきた。

日曜日には、入る前に、右と左を見ていた。車を信用していない人が、道をわたるときみたいに。でも今度は、まっすぐ入ってきた。ヘルメットをかぶったまま。イナズマ便の人からかくれる必要は、もうなかった。知られてはいけない二人は、火曜日に、テーブルクロスつきで知ってしまったから。

来るとは思っていなかった。火曜日から、フリータとぼくは、あまり話さず、そっと話した。二人でコップをのせたおぼんを運んでいる人みたいに。フリータが、声に出して計画を立てなくなった。それがいちばん目立った。れいぞうこが止まって、はじめて、鳴っていたことに気づくときみたいに。

トニョは、自転車を一台、うでの下にかかえていた。

いつもの自転車は、外のかべに立てかけてあった。これは赤くて、とても小さくて、パンのかたまりを持つように持っていた。ハンドルには、物置のほこりがついていた。

トニョのじゃなかった。いや、トニョのだった。昔の。

トニョは、自分の箱のわきを、すわらずに通りすぎた。箱は、マラさんが土曜日においたままだった：ひっくりかえして、スツールのとなりに、からっぽで。フリータは、スツールから立ちあがりかけて、また腰(こし)をおろした。それを二回やった。

「日曜日からずっと、頭の中でチリーンが鳴っているんだ」とトニョは、マラさんに、ほかのだれでもなく言った。「あれが何の音か、わかった気がする。ちゃんとおぼえているか、たしかめたい。あけたい。でも、ここじゃない。ショーウィンドウのない所で」

マラさんは、理由を聞かなかった。3番を棚(たな)からおろして、ぼくたちを、おくの部屋につれていった。

おくの部屋には、かさのない電球と、ひものかかった棚(たな)、ほうそう紙、かべにつまれた配達用のふくろ、小さなテーブルがあった。マラさんは、箱をそのテーブルにおいた。

「見るためにあけるのは、サインじゃない」とマラさんは言った。トニョを見ながら言った。かさをわたす人のように：雨がふっているからじゃなく、念のために。「サインがなければ、夜明けにもどる」

トニョは、うなずいた。

フリータは、ドアのところで、わくの両側に片足（かたあし）ずつ置いて、立っていた。

「いてもいい？」と聞いた。ちゃんと聞いたのだ。

トニョは、しばらく考えた。どれくらいか、わからない：時間をはかるのはフリータの仕事で、フリータは忙（いそが）しかった。

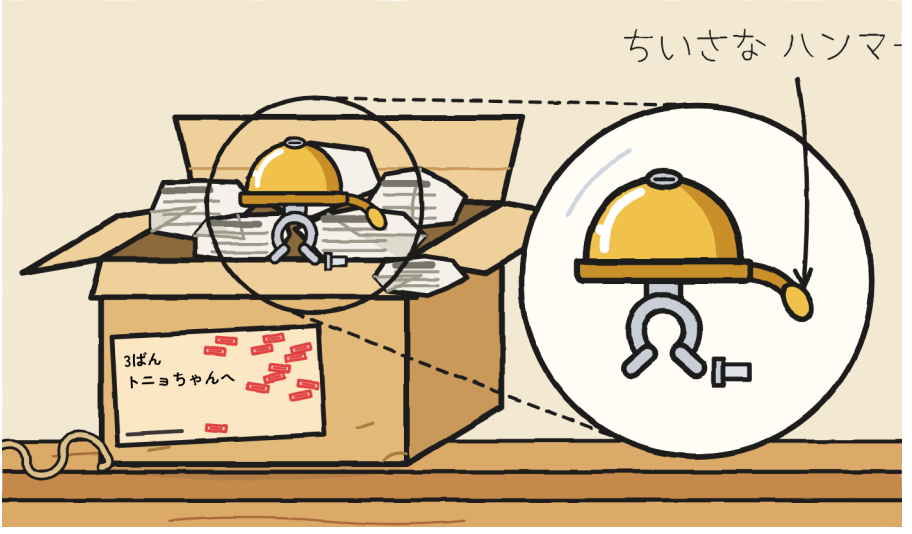
「何もさわらないなら」

「箱にも、その話にも、さわらない」

フリータは、すみのふくろにすわった。

トニョは、ヘルメットをぬいで、くぎにかけた。ヘルメットがないと、ぺしゃんこになった茶色のかみと、火曜日ほどは赤くない耳が見えた。それから、ひもをほどいた。ほうそう用のひもで、紙と同じ色になっていた。中には、新聞紙が入ってい

て、ひとりでにやぶれそうなほど古かった。トニョは、指さきで、そっと開いていった。そして、紙のあいだに……



自転車の小さなベル。金色で、ばねにつながった小さなハンマーがついている。ゆらすだけで鳴る。

1番はかみついた。2番は走った。3番はただ鳴るだけ。

ドラゴンも足もない。ベルがひとつ。気に入った。 —J.

紙の下には、四つにおりたたんだメモがあった。トニョはそれを、テーブルの上で開いた。字は、つまっていて、かたむいていて、走っているバスの中で書いたようだった。すみに、インクのしみがあった：

「トニョちゃん：また鳴るって、言ったよね。もう鳴るよ。おそくなってごめん。 ―R.」

そして、その下に：

「P.S. もしかして、大きくなったかも。ベルは、そのまま。」

トニョは、二回読んだ。

「ひどい字だな」と言った。

それきり、しばらく何も言わなかった。

R.は約束をおそく守る。フローラさんがそう言った。どれくらいおそいか、とは言わなかったけど。 ―J.

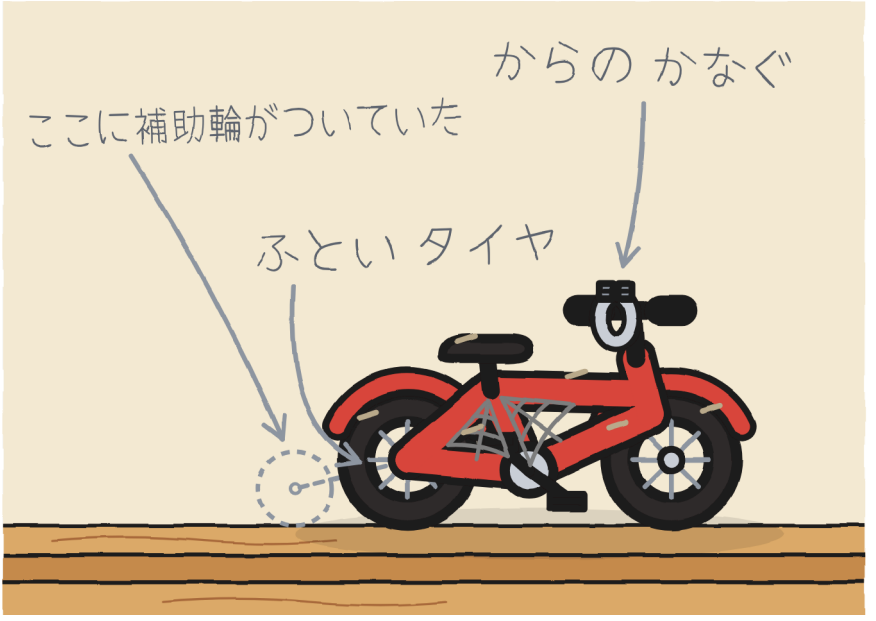
それからトニョは、箱をどけて、小さな自転車をテーブルの上にのせた。

ぼくは、自転車をかいた。矢じるしをつけて。

ふといタイヤ。うしろのタイヤのそばに、補助輪（ほじょりん）があったあと。そしてハンドルには、からの金具（かなぐ）。ねじもついている。

「ぼくのだった」とトニョは言った。「このベルがついていた。ある日、鳴らなくなった。カチッ、と言ったきり。だれか

が言ったんだ。『かしてごらん、トニョちゃん。なおして返してあげるから』」



「だれが？」とフリータはつい聞いてしまって、両手で口をおさえた。

「顔はおぼえてない。ベルはおぼえてる。それと、ずいぶん待ったことも」

フリータは、両手を口にあてたままだった。

「うちでは今もトニョちゃんとよばれてる」とトニョは言った。「イナズマ便ではちがう。イナズマ便ではトニョだ。最初の日に、自分でカードに書いた」

ぼくは、トニョがイナズマ便のボールペンで、名前の欄（らん）に「トニョ」と書くところを思いうかべた。だれにも何も言われずに：町でたった一つ、ほかのだれかにつけられていない名前。

「トニョちゃんの何がいけないの？」とぼくは聞いた。ほんとうに聞いたのだ。何のつもりもなく。質問（しつもん）は、ヒックみたいなものだ：出てしまう。

「何も。ゾーイが言うまではな。イナズマ便ではあだなは取れない。ブルーノを見ろ」

「火曜日から、ブルーノはぼくをトニョちゃんと六回よんだ」とトニョはつけくわえた。「数えた」

フリータは、すみで小さくなった。

だれも、どうつづければいいのか、わからなかった。そのとき、フリータが聞いた：

「まだのれる？」

聞かずにはいられなかったのだ。

マラさんは、自転車をテーブルからゆかにおろした。高いスツールから、だれかをおろすときのように、そっと。トニョは自転車を見た。マラさんを見た。そして、すわった。

のれた。まあ、なんとか。ひざが耳のところまで来て、ひじが横にはみ出していた。

マラさんが、ほかの人だったら笑い声になるような音をたてた。トニョも笑った。土曜日から、トニョが笑うのを見ていなかった。火曜日に笑ったのはブルーノだった。今度は、トニョが笑った。ひびきがちがう。

あかメーター：0。これもちゃんと数えるから書いておく。 —J.

ぼくには、一つ、思いついたことがあった。それを言うことは、助けることなのか、おすことなのか、決めなければならなかった。トニョが、そんなふうにすわって、もう体に合わない自転車の上でちぢこまっているのを見ていると、その差は、かみの毛一本ぶんに思えた。ぼくは、アドバイスじゃなく、ただの事実として言った。

「今の自転車には、もうベルがついてる」とぼくは言った。「イナズマ便のだ。これをつける必要はない。しまっておいてもいい。もどらせてもいい」

「知ってる」とトニョは言った。

でも、ぼくを見た。まるで、だれにもそう言われたことがなかったように。

すみで、フリータが、ぼくの声に顔をあげた。何も言わなかった。しまっておくのが、わかった。

フリータは、十一分間だまって、聞いていた。ペンをしまって、オーバーオールのポケットに両手を入れて。十一分だったことは、あとでフリータが、ぼくのノートに自分で書いたから、知っている。

十一分。したがしびれた。 —J.

「ひとりで試したい」とトニョは言った。

ぼくたち三人は外に出た。トニョは、おくの部屋のドアをしめた。

フリータは、聞かないように、店の反対のはしまで行った。ぼくも、聞かないように、絵をかいた：トニョのいすには、も

うてんがいがある。それでも聞こえてしまった。マラさんは、もう整理してあるひもを、また整理した。

チリーン。

土曜日と同じチリーンだった。そのあと、もうひとつ。そして、長いあいだ何も聞こえなかった。三人とも、ドアを見なかった。

出てきたとき、トニョは、かたほうの手にベル、わきの下に箱をかかえていた。小さな自転車は、おくの部屋のふくろによりかかって、からの金具をつけたまま、のこされた。

「あしたまで持っていく。サインはしない」

「それなら、夜明けにもどるよ」とマラさんは言った。

「もどればいい。ひとばんだけ、持っていたい」

「もしベルを箱の外におくと？」とぼくは聞いた。

「やったことがない」とマラさんは言った。「朝の7時にためすつもりもない」

トニョは、全部、箱の中にしまった：ベルも、メモも。

金曜日、夜明けに、ぼくの通りはまた鳴りだした：チリーン、チリーン、チリーン。屋根の上を、急ぎもせずに。同じ三

つのまどに明かりがついた。同じ犬がほえた。十四回目のもどりだ。

その前のことは、見ていない。その日の夕方、トニョが、自分の箱から、ゆかを見ながら話してくれた：

「今度は、げんかんマットじゃなく、ぼくのベッドのよこの台でねた。夜明けにガラスにぶつかりはじめたから、まどを開けてやった」

「それで、どんなふう？」とぼくは聞いた。「ひとばん持っているって」

トニョは、しばらく考えた。

「長い」

その夕方、ぼくはトニョの二つの自転車を、となりどうしにかいた。今の自転車にはベルをかきたした。とてもよくにあう。下に、「まえ」と「いま」と書いた。

フリータは、その上に紙切れをはった。ちょうどハンドルのところに、かいたばかりのぼくのベルをかくして：

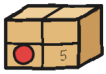
まだつけていない。 —J.



荷物にまどを開けてあげるなんて。ていねいだね。 —J.

ぼくは、すみから、つめでそっとはがそうとした。

フリータの言うとおりだった。ちょっとくやしい。



第 5 章

ひみつの はなし

金曜日の夕方、3番は棚(たな)の上にあった。はんこは十四こ。

トニョは、自分の箱にすわって、遠くからそれを見ていた。

フリータは、二日前から何かをじゅんびしていた。それがわかったのは、二日前から、それが何なのか、ぼくに話さなかったからだ。

最悪のことをかくごした。フリータが前にひみつでじゅんびしたとき、そのひみつには、テーブルクロスがついていた。

今度は、まず、テーブルクロスがないことをたしかめた。つくえも、サイン台も、はさみで切った小さなまども、ない：せんのある、ノートの一まいだけ。フリータは、それを一言も言わずにトニョのひざにのせると、手をうしろにまわして、かべまで下がった。必要より二歩多く。かぞえた。

二つえらべる紙だった。



トニョは、二回読んだ。二回目は、Bだけを。ぼくは、トニョのかたごしに、潜望鏡（せんぼうきょう）みたいにひかえめにのぞきこんで、三回読んだ。わなをさがして。

トニョは顔をあげて、マラさんを見た。

「サインしたら、だれが知る？」

耳のところが、あかメーターの1だった。

「わたし。それと、この引き出しから出ない記録の本」

マラさんは、カウンターの引き出しを、見えるだけ開けた：ぶあつい本が、ゴムでとめてある。それから、こしで引き出しをしめた。

「イナズマ便には？」

「わたしからは言わない。記録ははりがみじゃない」

フリータは、口を開けて、またとじた。マラさんのうしろのかべでは、みどりのはりがみが、まだ「のこり18」と言っていた。

はりがみには番号だけ。名前はひきだしの中。 —J.

トニョは、自分の箱から立ちあがった。箱は、からっぽの箱がたてる、うつろな音をたてた。

「Bにする」

フリータは、とびはねなかった。とびはねないのを、ぼくは見た。

こぶしを、指の関節が白くなるまでにぎりしめた。

「おくの部屋で」とトニョはつづけた。「それに、きみたち二人にいてほしい」

「わたしも？」とフリータが聞いた。

「いちばんぼくのサインを見たがっているのは、きみだ。前にいてほしい」

ぼくの役目は、3番を棚からおろすことだった。青いスツールにのって、両手でおろした。息をとめて、スープのお皿をふちまで運ぶみたいに。それでも鳴った：小さなチリーン。礼儀正しい、「失礼します」という意味のやつ。



おくの部屋にもどった。トニョはヘルメットをぬいで、ふくろの上におき、あごひもをたらした。

ぼくは3番をテーブルにおいた。トニョは、ふたを開けて、ベルとメモをまた出した。電球の下に、ならべた：ベルは、金色で、よこむきに、小さなハンマーがばねの上でじっとしている。メモは、開いて、手のふちでのばしてあって、Rのひどい字は、あの明かりの下では、絵みたいに見えた。

おつりを数えるように、ゆっくり見た。

「サインする前に、何にサインするのか見る」と、だれの方も見ずに言った。

フリータは、Tシャツと同じ色になった。

フリータは、トニョにみどりのペンを、キャップをつけたままわたした。ペンのおしりのほうを向けて、先を自分に向けて。はさみをわたすときみたいに。それから、すみに行って、ふくろにすわった。ぴんとのばした背すじ、高いあご、へんなかっこうのひじ。

「なにしてるの？」とぼくは聞いた。

「手をおしりの下にして、すわってるの。手を出さないために」

ほんとうにそうしていた。両手を、太ももの下に一つずつ入れて、ふくろをおさえていた。くちびるを動かしていた。ぞうを数えているんだと思う。

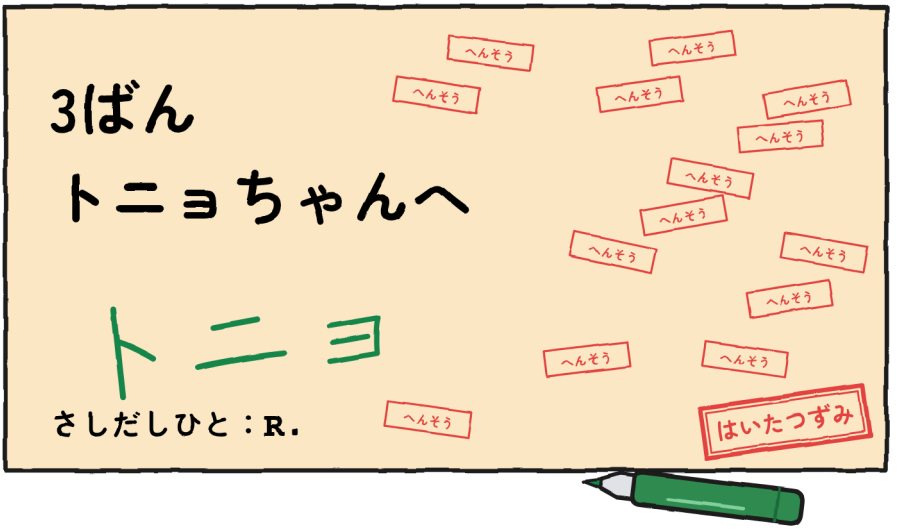
ぼくは、ベッドの中で、いざというとき、間に合うように知らせる練習をしておいた。その夕方は、何も言わなくてすんだ。

ぼくはノートをとじて、わきにかかえた。

そのあと、グニが全部書きとめた。 —J.

トニョは、ペンのキャップをとって、サインした。

まよわなかった。でも、時間がかかった。「ト」。「ニ」。小さな「ョ」を、ゆっくり。三つの字。はっきりと、まっすぐ。



すみに、だれもおしていないはんこがあらわれた：はいたつずみ。

ラベルには「トニョちゃん」、サインは「トニョ」。

「これでいいのか？」とトニョはマラさんに聞いた。「同じ名前じゃない」

マラさんは、ラベルを上から下まで読んだ。さわらずに。

「サインするのは、受けとる人」とマラさんは言った。「そして、受けとったのはあなただよ」



店にもどった。トニョは、片手（かたて）にベルを持って、またヘルメットをかぶっていた。ぼくは、まだノートをとじたままだった。マラさんは、電球を消して、いちばんあとから来た。

引き出しを開けて、ゴムでとめた本を出して、配達を書いた：日づけと、番号と、三つの字。

フリータは、もう青いふみ台を手に持っていた：いつものだ。はりがみに手がとどくように使う。もう、かべに向かっていた。急に止まった。ふみ台を、音もたてず、足を下にして、ゆかにもどした。

「はりがみを変えていい？」と聞いた。

マラさんじゃなく、トニョに聞いた。

トニョは、はりがみを見た。かくにんするときのように、時間をかけて。

「数字が一つ書いてあるだけだ」

「それだけ」

「いいよ」

フリータは、ふみ台にのって、18を一本の線で消して、となりに、きえないみどりで、大きな17を書いた。

先に聞いたからね。覚えておいて。 —J.

トニョは、外に出て、自転車をかべにたてかけ、リュックからドライバーを出した。

「つけるの？」とぼくは聞いた。

「うん」

「イナズマ便のベルは？」

「あれはイナズマ便の。これはぼくの」そして、顔をあげずに、つけたした：「自転車、おさえてくれる？」

ベルをつけたのはトニョだ。ぼくは自転車をおさえただけ。それも、たのまれたからだ。金具が、ハンドルのイナズマ便の灰色（はいいろ）のベルのとなりで、かちりとしまった。トニョは、これでいいと思うところまで、ねじをしめた。マラさんは、入口からうでを組んで見ていた。マラさんにとって、それは、はくしゅのかわりだ。

それからトニョは、指で小さなハンマーをはじいた。

チリーン。

五時十分にイナズマ便が通った。一列で、通りをやってくる：ゾーイが先頭で、おさげを風になびかせて；ブルーノはうしろで、フレームに空気入れをつけて；最後は、トニョのぶんのすきま。ブルーノがブレーキをかけた。

「なんか鳴ってるな？」

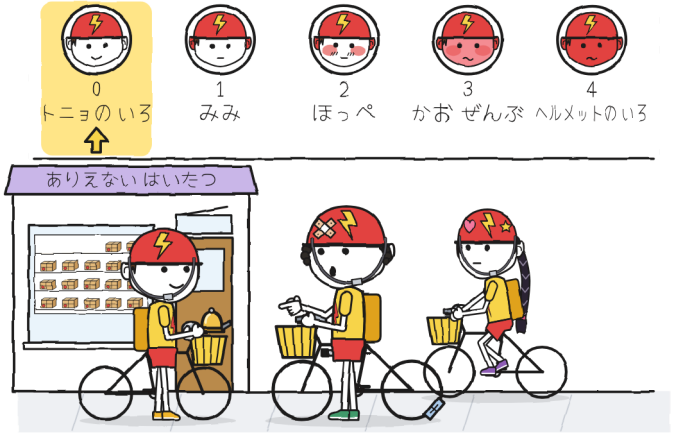
「ベルだ」

「どこの？」

「ぼくのだった」

「トニョちゃんのころの？」

ぼくは、トニョの顔を見た。なんともない。耳も。



「そうよばれていたころのだ。今のぼくの名前はトニョ。きみはなんて言う？」

「パ……」ブルーノは、言葉をのみこんだ。「ブルーノ」

「じゃあ、ブルーノだな」

ブルーノは、構内放送（こうないほうそう）で名前をよばれたみたいに、頭をあげた。イナズマ便では二年間、だれも、かれをブルーノとよんでいなかった。

ゾーイが、口を開けた。

火曜日に、ゾーイは「ブルーノ」を線で消して、「パンク」と書いたのだった。

トニョは、小さなハンマーをはじいた。一回だけ。だれのほうも見ずに。

チリーン。

ゾーイは、口をとじた。少し考えた。信号が黄色のあいだくらい、かかった。

「いい音」とゾーイは言った。「おくれるよ、トニョ」

「トニョ」と言った。何もつけたさずに。 —J.

一列になって、行ってしまった：ゾーイ、ブルーノ、そして最後にトニョ。親指は、いつも小さなハンマーのそばにあった。



その夜、ぼくはまたブラインドをあげたままにした。

見はりのいす二つも、まどの前においたままにした。ぼくのと、目ざまし時計の小さいの。習慣（しゅうかん）だから。それから、目ざまし時計をわきにかかえて、ベッドに入った。その夜は、ねころんで見はりだ。

「また見はり？」とお母さんが、ろうかから聞いた。

「今日は、何も起こらないことを見はってるんだ」

「それは、わたしがとくいよ。さあ、ねなさい」

十二時近くまで、がんばった。

ペンのキャップをあけたままねてしまった。まくらが緑になった。 —J.

目ざまし時計が鳴る前に、目がさめた。体じゅうが、チリーンのじゅんびをしていた。

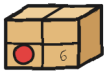
夜があけた。

何も鳴らなかった。

チリーンも、まどが開く音も、4番の犬も。

ぼくの通りで聞いたなかで、いちばんすてきな静けさだ。





第 6 章

いまのところ

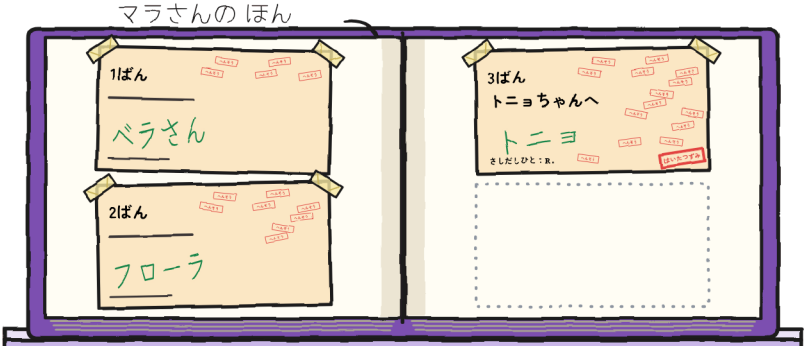
土曜日の十時に、棚をかいた。荷物は十七こ、空きは三つ。

ぼくは、ちゃんと服を着て通りをわたった。それだけで進歩だ。最初の土曜日は、パジャマにスリッパだった。入る前に、ドアの上の小さなまどを見た。マラさんが、帰ってくるもののために開けておくまど。開いたままだった。だれも入っていなかった。

空きには、荷物よりも時間がかかった。それぞれに、きれいな四角がのこって、まわりにはほこりがある。ぼくは、えんぴつをおさずに、かいた。

そのあいだにマラさんは、引き出しから本を出して、カウンターの上に開いた。ドアに背を向けて。3番のラベルをはがして、本にはった。ほかの二つといっしょに。

トニョは、土曜日のばつを、配達のときと同じように守る：時間どおりに、手をぬかずに。ヘルメットをかぶったまま、カウンターのむこうから見ていた。サインした名前が、箱から本へうつっていた。トニョは本を見た。しまったドアを見た。それからもう少し長く、本を見た。



三十七このはんこ、二十三と十四。みどりのサインが三つ。

たまご、たね、ベル。三つともおくれてとどいた。三つともとどいた。

三つめはトニョがサインした。今度は、わたしはペンをわたしただけ。 —J.

トニョは、箱にすわって、もぞもぞ動いた。今度は棚（たな）を見なかった。

「その箱は、まだ『いまのところ』のままだよ」とマラさんは、本から目をあげずに言った。

「いまのところは、これでいい」とトニョは言った。

「いまのところ」は何年もつづくことがある。3番に聞いてごらん。 —J.

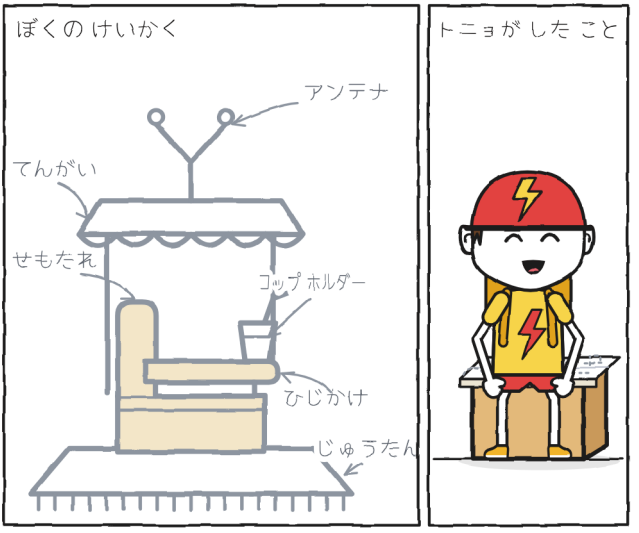
ぼくは、トニョのいすの計画を見せた。一週間かけてつくった計画だった。

決定版で、寸法と凡例つき：配達用の箱を王座にするんだ。あらしの夜のせもたれ。その2のひじかけとコップのおき場。その3の、ふさのついたてんがい。それから新しいじゅうたん、これもふさつき。アンテナは、夜中の十二時に、ひとりでできた。何を受信したいのかわからない。だから、そのままにした。

ディプロマをわたすみたいに、両手でさしだした。トニョは、R.のメモを読んだときと同じ真剣さで、はしからはしまで見た。一度も笑わなかった。ありがたかった。フリータは、ぼくのかたごしに、写真の中に親せきを見つけた人の顔でのぞいていた。

「それ、もらっていい？」とトニョは言った。

四つにおって、箱の上におき、その上にすわった。



外で、ベルがハンドルになな めについていた。空気を吸いに出たとき、気づいた：バスの中でねむりこむ頭みたいに、半回転ぶん、かたむいていた。

「しめる間おさえてあげる」とぼくは言った。

「ひとりでできる」

トニョはできた。ぼくはそのねじを見ていた。百回まわりそうだった。

トニョは、舌のさきを出していた。フリータは、ぼくのとなりで、オーバーオールのポケットに、手首まで両手を入れていた。ポケットの中で、こぶしがわかった。ぼくはオーバーオールを着ていないから、うしろで、片方の手をもう片方の手でつかんだ。

トニョが最後の一回転をすると、ベルはまっすぐ前を向いた。兵隊みたいに、ぴんと。

「できた」とトニョは言った。

ぼくは、自分の手を自分ではなした。見た目よりむずかしい。

中に入ると、フリータが、カウンターの下から、サインの紙を出した。小さなまどは、紙のふたとたくさんのテープでふさいであった。サインが二つ、あなが一つ。それと、その朝から、つぎはぎが一つ。つぎはぎは、その紙のいちばんじょうぶな所になっていた。

「わなのだよ」とフリータは、マラさんが聞く前に言った。「なおした」

そして、それをトニョの前においた。

「サインをくれる？　ほんもの。下になにもないから」

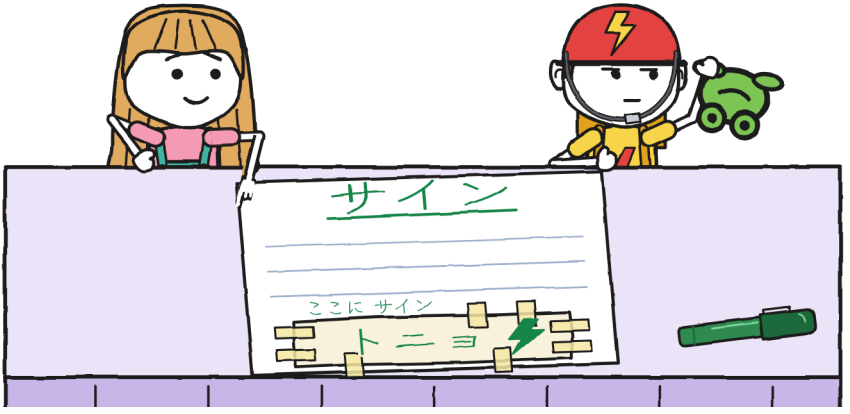
ゆっくり、一回だけ言って、待った。

トニョは紙の下を見た。カウンターの下も見た。カエルをひっくりかえした。

トニョがカエルを持ちあげたとき、フリータの顔の筋肉(きんにく)が一つ動いた。それがたった一つの異議(いぎ)だった。フリータは自分で、それを引っこめた。

「いいよ」

つぎはぎの上にサインした：「トニョ」、最後の字に稲妻(いなずま)をぶらさげて。



当然だよ。 —J.

お昼、トニョは配達に出た。ぼくは、ドアから見送った。ベルは、しっかり定位置にあった。ベレーぼうのおじいさんが、つえをついて、道をゆっくりわたっていた。角の横断歩道を。

トニョはブレーキをかけた。片足を地面につけて待った。それからベルを一度だけ鳴らした。そこにいることを知らせるために。

チリーン。

おじいさんは、つえをあげてあいさつして、自分の歩く速さで進んでいった。

マラさんが、ぼくのとなりでドアから顔を出していた。うでを組んで。

「アントニオさんよ」とマラさんは言った。「わたしのリストの、トニョちゃん二番目」

「そうだといいんだけどね」の人だ。ぼくたちの歩道まで来て、トニョの自転車のそばで足を止めた。トニョは行っていなかった：そこで、片足を地面につけ、手をハンマーの近くにおいて、急がずにいた。

「そのベルは新しいのかい？」とおじいさんは聞いた。

「古いです」とトニョは言った。「ぼくのでした。トニョちゃんとよばれていたころの」

「わたしをそうよぶ人は、もう六十年いない。よかったら取りかえよう：きみがアントニオさん、わたしがトニョちゃん」

トニョは考えた。ベレーぼうを見て、それから自分のハンドルを見た。

「いまのところ、いいえ」

アントニオさんは、うなずいて、指一本でベレーぼうにふれた。取引を終わらせて、しかも開けておく人みたいに。

「わたしはここにいるよ」と言った。「ゆっくりわたるからね」



トニョは、配達から十二分でもどってきた。フリータがはかっていた。自分の時計を見つめて、何も言わなかった。トニョは、箱にすわった。

ぼくは、R.のカードを出した。顔のところが大きな「？」になっている絵と、その下に「R.」。手がかりはもう六つあった。ぼくは二つ書き足した：

- 手がかり7。小さな自転車のころのトニョを知っていた。
- 手がかり8。鳴るベルを約束した。何年もかかった。

トニョは、ボールペンをかしてと言って、その下に自分の字で書いた。リストの外に、配達員の字で、つまっていて、下のページにうつるほど強く：

まだ：せつめいを して もらって いない。

「お礼は言わないの？」とフリータが聞いた。いっぱいのカップを運ぶ人みたいに、ゆっくり。

「お礼ともんく。両方だ。だれに言えばいいのか、わかったらね」



一時にベラさんが入ってきた。パンくずをだいて、かみに小さなえだをつけていた。

「たすけてほしいの」とベラさんは言った。「パンくずはもう飛べる。今は、おりるための安全な場所がいるの」ベラさんは少しだまった。「きのうは、わたしのスープをえらんだの」

ぼくは、最初の一言から、スツールの上でせすじをのばした。パンくずは、つのにめんを一本ぶらさげていた。ぼくを見て、ぼくの「ぼくじゃない」の顔をした。

あなたの顔、そっくり。めんもついてる。 —J.

「速い人がいる？」とトニョは、箱の上から聞いた。

パンくずは、ベラさんのうでから身をのりだして、トニョのヘルメットのにおいをかいだ。

「待てる人がいるの」とベラさんは言った。

「ぼくも待てる。今週から」

トニョのうしろで、フリータが、両手をあげた。とてもていねいな強盗（ごうとう）に降参（こうさん）する人みたいに。

わたしも待てる。もういい？ —J.

わからないことがあると、ぼくはリストを作る。今度は、わかっていたのに、リストができた：このノートの最後のページ、配達の表。

3番の配達。それぞれがかかった時間：

- イナズマ便：10分。
- R.：何年も。
- トニョ：六日。
- フリータ、きいている：11分（最高記録）。

トニョは、箱から立ちあがって、ヘルメットをなおして、指でベルがまっすぐかどうか、たしかめた。まっすぐだった。

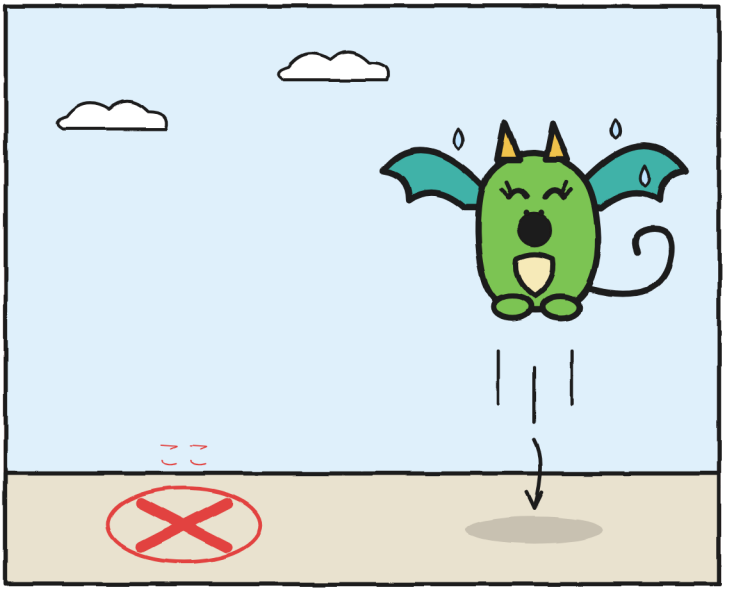
配達に出かけた。通りから、チリーンと聞こえた。もうひとつ。

今度は、トニョがベルを鳴らしていた。

わたしはまだ、ひとりで鳴っている。練習中。 —J.

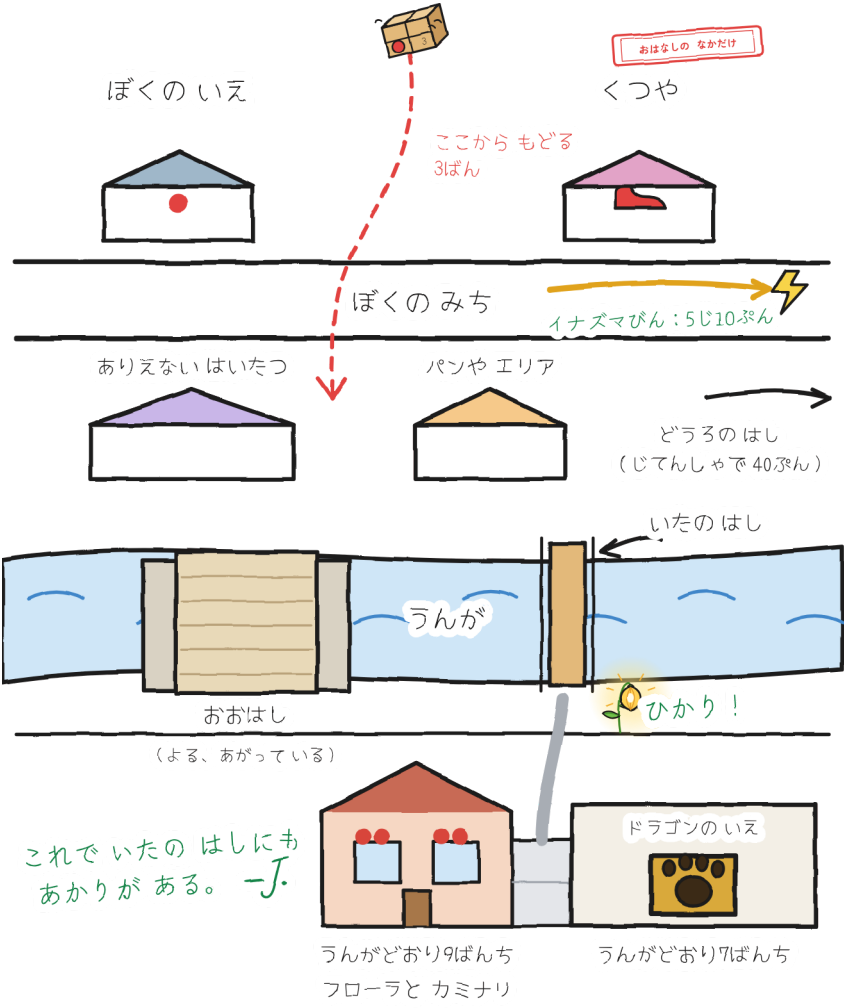
ありえない はいたつ ・4

（もうすぐ）



あなたのまねをするドラゴンの子は、どこにおりるのかな？ ーJ.

まちの ちず　その3


おはなしの なかだけ
ぼくの いえ
くつや
ここから もどる
3ばん
ぼくの みち
イナズマびん：5じ10ぷん
ありえない はいたつ
パンや エリア
どうろの はし
（じてんしゃで 40ぷん）
いたの はし
うんが
ひかり！
おおはし
（よる、あがっている）
これで いたの はしにも
あかりが ある。 -J.
ドラゴンの いえ
うんがどおり9ばんち
フローラと カミナリ
うんがどおり7ばんち

きみは なんて よばれる？

トニョは、トニョちゃんとよばれていた。今は、自分でなんとよばれるかを選ぶ。きみは？

こう よばれるのが すき……

こうも よんで いい……

こうは よばれたく ない……

わたしはフリータ。「J.」は、サインするときだけ。 —J.

ひとつの おはなし、六つの サイズ

この本には六つのサイズがある。3さいから16さいまでで、ことばは20いじょう。XXS、XS、S、M、Lは同じ絵で、物語を一ページずつ語り、サイズが上がるごとに、細かいところまで話すようになる。XLは小説だ。同じ物語に、グニが心の中で考えても口には出さないことのための場所がある。

CEFRのレベルは目安です。XXS：pre-A1・XS：A1・S：A2・M：B1・L：B2・XL：B2–C1。

どのサイズも、同じチリーン。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう（Lサイズの練習問題つき）

本物の自転車：やること

1. ヘルメットはいつも、しっかりとめる。「すぐそこまで」のときも。
2. 見えるように、聞こえるように：ライト、明るい色の服、ベル。ベルは知らせるもの。命令するものではない。
3. 両手でハンドルをにぎる。何かに気をとられたら、安全な場所で止まる。
4. 歩道は歩く人のもの。そこでは自転車を押して歩く。道をわたる前は、止まって、見る。

「おはなしの なかだけ」のはんこは、おはなしでは起きても、道では起きないことにおす。

でかける まえに、じてんしゃを みよう

